はじめに――「探究」の可能性

❖平野多恵（成蹊大学）

はじめに

2023 年 7 月 30 日（日）、熱い午後だった。日本文学アクティブラーニング研究会主催「どうする !?「国語」の探究型学習　高校の探究と大学の研究をつなぐ」が成蹊大学 6 号館 501 教室で開催された。

当初、対面で 45 名、オンライン 100 名の募集としたが、対面は申込から一週間ちょっとで満員となり、オンラインは定員の 100 名を拡充し、最終的に対面とオンラインあわせて 296 名（対面 45 名、オンライン 251 名）の申し込みがあった。その内訳は高校教員 151（48. 4%）、大学教員 69（22. 1%）、大学生・大学院生 49（15. 7%）、中学校教員 9（2. 9%）、会社員 9（2. 9%）、中高一貫校教員 3（1%）、一般 3（1%）、出版社勤務 2（0. 6%）、高専教員 1（0. 3%）。高校教員、大学教員、大学生・大学院生の順で多く、高校・大学の教員はもちろん、教職に就く前の若い人の関心の高さがうかがわれた。

本シンポジウムを企画・運営した日本文学アクティブラーニング研究会は、2019 年から日本学術振興会の科学研究費補助金「高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究」の助成を受けて活動している。研究会自体は 2013 年からスタートし、高校生と大学生、大学院生、高校・大学の教員、社会人がともに学びあうワークショップの開催を核として活動を続けてきた。古典文学の探究的な学びを創造性につなげる教材の開発をめざし、安心・安全な場づくりをモットーとしながらワークショップを開催し、論文や本研究会の公式ウェブサイトでその活動内容を公開している。研究会の活動については、本報告書の吉野朋美氏「高・大・社会人連携による古典文学ワークショップの試み」をご覧いただきたい。

高校では 22 年度から新学習指導要領にもとづく授業がはじまり、探究型の学びに重点が置かれるようになった。その点で今回の企画は高校から大学へと接続可能な探究のあり方を議論する絶好のタイミングである。よって今回の意見交換会では、国語の探究的な学びを生徒･学生にとって知的刺激に満ちたものにするにはどうしたらよいか、そのために高校と大学の教員がどのように連携できるかについて話し合うことを目指した。話し合いのもとになるものとして、「高校国語」の「古典探究」「文学国語」「論理国語」、海外における古典文学教育と ICT 活用、くずし字教育とアクティブラーニングまで、最前線の教育・研究に取り組む五人の報告者と現役の高校教員によるコメントでシンポジウムを構成した。

1　「探究」とは？

まず、各報告の前に、「探究」の前提を確認しておきたい。2022 年度から高校の新学習指導要領に基づいて「古

典探究」「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」「理数探究基礎」「理数探究」という７つの探究科目がスタートした。「古典探究」の教科書を見ると、比較読みや話し合いなど、生徒が主体的に考えたり活動したり課題は多少増えたものの、従来の教科書とそれほど変わっていないのが実情である。

それに対して「探究」として注目を集めているのが「総合的な探究の時間」だ。従来の「総合的な学習の時間」から変更されたもので、「総合的な探究の時間」では生徒自身が自己の在り方・生き方と深く関わる課題を自分で発見する過程が重視されている。「総合的な探究の時間」については文部科学省『（高等学校編）今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開　未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現』が令和５（2023）年３月に公開され、高等学校で授業を実施・運営するポイントが網羅されている。

「古典探究」「日本史探究」のような各教科の探究と「総合的な探究の時間」はどう違うのだろうと思った人もいるのではないだろうか。上記の『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開』22 頁にもとづいて違いを簡単にまとめると、各教科の探究が古典や日本史などの科目などの理解をより深めるのに対し、「総合的な探究の時間」は、特定の科目にとどまらない、あるいは科目横断的な総合的・統合的アプローチによって問題を多角的に俯瞰し、実社会や実生活における、すぐ解決できない課題や正解が一つでない課題に納得できる最適解を見出すのだという。

探究課題の設定については、以下の四つに分類されている。①横断的・総合的な課題（現代的な諸問題）、②地域や学校の特色に応じた課題、③生徒の興味関心に基づく課題、④職業や自己の進路に関する課題で、これらの課題の下に「国際理解」「情報」「環境」などの課題例が示されている。

国語教育にかかわる方にとっては、これらの課題に「国語」の探究的な学びをどう関連させられるのかも関心の

四つの課題	探究課題の例
横断的・総合的な課題（現代的な諸課題）	外国人の生活者とその人たちの多様な価値観（国際理解）
	情報化の進展とそれに伴う経済生活や消費行動の変化（情報）
	自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題（環境）
	高齢者の暮らしを支援する福祉の仕組みや取組（福祉）
	心身の健康とストレス社会の問題（健康）
	社会生活の変化と資源やエネルギーの問題（資源エネルギー）
	食の問題とそれに関わる生産・流通過程と消費行動（食）
	科学技術の発展と社会生活や経済活動の変化（科学技術）
	など
地域や学校の特色に応じた課題	地域活性化に向けた特色ある取組（町づくり）
	地域の伝統や文化とその継承に取り組む人々や組織（伝統文化）
	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会（地域経済）
	安全な町づくりに向けた防災計画の策定（防災）
	など
生徒の興味・関心に基づく課題	文化や流行の創造や表現（文化の創造）
	変化する社会と教育や保育の質的転換（教育・保育）
	生命の尊厳と医療や介護の現実（生命・医療）
	など
職業や自己の進路に関する課題	職業の選択と社会貢献及び自己実現（職業）
	働くことの意味や価値と社会的責任（勤労）
	など

探究課題の設定　『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開』77 頁

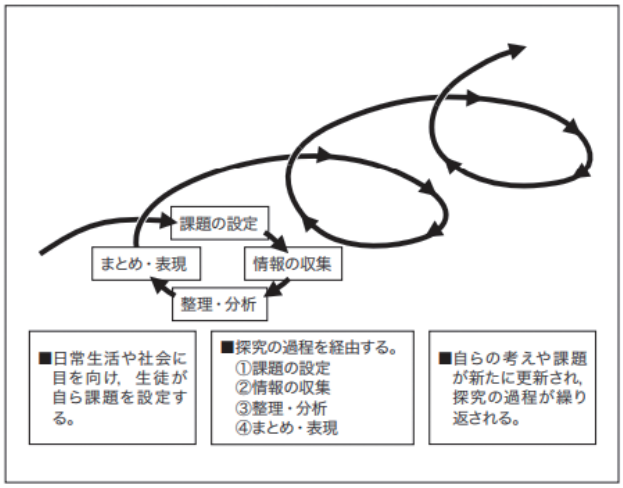

図１　探究における生徒の学習の姿

一つなのではないだろうか。

探究における生徒の学習の姿については、探究の過程とその繰り返しが重視されている。図１（『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開』24 頁）に示されるように、そのイメージは①課題の設定　⇒②情報の収集　⇒③整理・分析⇒④まとめ・表現という探究の過程を繰り返して成長していくというものである。

実際のところ、学習者が自ら課題を設定し、その課題について情報を収集し、それらを整理分析してまとめ、他者に伝わるように表現するという①～④の探究の過程は、大学における研究の過程そのものであり、日本文学アクティブラーニング研究会のワークショップで模索してきた探究的な学びのありかたとも重なっている。つまり、高校における「探究」は、大学の「研究」の基本とつながるものといえるだろう。

新学習指導要領で「探究」の時間が設定される以前から、高校の「教育」と大学の「研究」をつなげる必要性が言われ続けてきた。研究が細分化していくなかで、それはますます難しくなっているように思われるが、「探究」が求められる今こそ、高校と大学における学びの姿勢や方向性の接続、高校と大学の連携のありかたを再考する良い機会といえるのではないだろうか。

探究的な学びの重要性に注目が集まるなか、探究型学習の参考書が次々と刊行されているが、先進的な事例紹介にとどまるものが多く、最適な答えが提示されているとはいえない。「国語」の授業で探究的な学びをどうおこなうのか、「国語」の探究型授業はこれからどうなっていくのか、授業のなかで何ができるのか、教員として何をするべきなのか、何ができるのか等、考えるべきことは多いが、これらは各教員が探究的な授業の取り組みを続けるなかで見えてくるものだ。その土台になるものとして、現時点での取り組みを共有し、高校と大学の教員が情報交換しながら探究の可能性や方向性を考えていくことが求められる。本シンポジウムは、そのための一つの場となることを企図したものである。

2　シンポジウムの構成と内容

本シンポジウムは二部構成で、第１部は探究型の学びにかんする最新かつ多様な実践報告とそれに対するコメント、そしてフロアとの質疑応答からなる。第２部は意見交換会「どうする !? 探究」で、会場に集まった参加者が高校・大学それぞれの探究型学習の可能性と相互の連携について語り合う時間とし、小グループでの話し合いの後、全体で共有した。

まず第１部の登壇者と報告内容について紹介する。

１番目は吉野朋美氏（中央大学）の「高・大・社会人連携による古典文学ワークショップの試み」。吉野氏は先に紹介した日本文学アクティブラーニング研究会による科学研究費の代表者であり、研究会の活動をまとめた業績「古典文学ワークショップの挑戦――日本文学アクティブラーニング研究会の活動を通して――」（『中世文学』66 号、2021 年 6 月）も執筆している。本報告書では、研究会の代表として、これまで取り組んできた高校・大学・社会人連携による古典文学ワークショップの実践についてまとめていただいた。

２番目は大橋崇行氏（成蹊大学）の「「文学国語」の可能性（二）　―創作としての翻案（アダプテーション）」（発表タイトル「文学国語の可能性　「書くこと」と「読むこと」をつなげる」）。大橋氏は山田美妙をはじめとする近代文学の研究者であるとともに、作家として日本の文学作品や歴史を題材とした小説を精力的に発表し、近著に『週末は、おくのほそ道。』（双葉文庫、2023）、『黄金舞踏 俳優・山川浦路の青春』（潮文庫、2024）がある。国語教育との関わりも深く、今回は「文学国語」における探究型の学びにつながる創作の可能性や具体的な実践について報告いただいた。

３番目は仲島ひとみ氏（国際基督教大学高等学校）の「論理国語で何しよう？」。国際基督教大学高等学校の現役高校生による伝説のシンポジウム「高校に古典は本当に必要なのか」の企画・運営は国語教育関係者の記憶に新しいだろう。著書『それゆけ！論理さん』（筑摩書房、2018）は堅苦しいと思われがちな論理学を楽しく学べる大人のための学習マンガとして話題である。今回はそのマンガを具体的にあげながら論理国語で何ができるのか、その可能性について報告いただいた。

４番目は高永爛氏（全北大学校）の「韓国の大学における日本古典文学教育とデジタル世界の出会い」（発表タイトル「韓国の大学における日本古典文学教育と Edu-tech 利用」）。高氏は日本の近世文学を専門とし、IT や ICT 等のテクノロジーを活用して韓国の全北大学校日本学科で学生の興味を喚起する古典の授業を展開している。報告書ではメタバースを活用して源氏物語を学ぶ実践例をはじめ、日本の古典文学を学ぶ授業の計画や運営についてまとめていただいた。

５番目は山田和人氏（同志社大学名誉教授）の「くずし字学習とアクティブラーニング」。山田氏はこれまで同志社大学の PBL 推進支援センター長としてプロジェクト型授業の実施を先導してこられ、同大学の古典教材開発センター初代センター長および古典教材の未来を切り拓く！研究会（通称：コテキリの会）の代表として、和本やくずし字をもちいた新しい古典教材も開発している。その成果は『未来を切り拓く古典教材　和本・くずし字でこんな授業ができる』（文学通信、2023）として刊行・Web 公開されている。今回はこれまでの活動および探究型学習の先進的な事例を具体的に報告いただいた。

コメンテーターは高校の国語科教諭である佐藤透氏（桐蔭学園高校）と森大徳氏（筑波大附属駒場高校）。佐藤氏は、桐蔭学園にアクティブラーニング研究の第一人者である溝上慎一氏を迎え、アクティブラーニング型授業を全校に導入する際に、大きな役割を果たされた。現在は桐蔭学園の入試対策・広報部長として探究や高大連携を推進されている。森氏は高校の国語教育の場に演劇的手法やマンガ・映像を取り入れて、クラスでの創作活動につながる取り組みもされている。仲島氏との共著『中高生のための文章読本』（筑摩書房、2022）ではノンフィクションを読むことの意義を示して注目されている。

今回の報告書では、佐藤氏「「国語」における探究型授業についての想い巡り」、森氏「シンポジウムを承けて――「国語」の領分と「探究」の真の目的」としてシンポジウムを終えての所感を寄稿いただいた。

第２部の意見交換会については、日本文学アクティブラーニング研究会のメンバーで第２部のファシリテーターをつとめた中野貴文氏（学習院大学）の「シンポジウム第２部「意見交換会」報告」にまとめられている。

本報告書の末尾には、シンポジウムの参加者アンケートに寄せられた探究型授業のアイディアや実践例、高大連携の可能性についての意見を集成したものを掲載した。

＊

本シンポジウムのチラシデザインは文学通信の岡田圭介氏・西内友美氏によるもので、題字の水色・黄色・赤は、水色の体に、黄色い鈴、赤い首輪のドラえもんがイメージされている。ドラえもんとのび太の冒険が「わくわく」するものであるように、本報告書がこれからの国語の学びをわくわくさせるきっかけとなるよう願ってやまない。

最後になるが、本シンポジウムは2020年に発足しコロナ禍の中でオンラインおよび対面オンラインのハイブリッド研究会を定期的に継続してきたコテキリの会の活動に啓発されて企画したものである。開催にあたり、コテキリの会の山田和人氏、加藤直志氏、加藤弓枝氏、三宅宏幸氏から格別のご支援をたまわった。シンポジウムの運営については文学通信の岡田圭介氏、西内友美氏、渡辺哲史氏の多大なご助力があった。登壇いただいた皆様には、ご多忙の中、それぞれ力のこもった原稿をお寄せいただいた。第２部意見交換会では、第１部登壇者と研究会メンバーに加えて、本研究会の協力者である関谷吉史氏（桐蔭学園高等学校 教諭）と水谷彩氏（相模女子大学中学部・高等部 教諭）に各グループのファシリテーターをご担当いただいた。当日の運営は日本文学 AL 研究会のメンバーが中心となっておこない、成蹊大学文学部日本文学科の有志学生の助力を得た。本報告書は、当日参加されたみなさまの熱気に励まされて完成したものである。この場を借りて、本シンポジウムにかかわったすべての方に感謝申し上げる。